

# 吉本隆明1949 —小林秀雄の影響からの脱却—

渡辺和靖

社会科教育講座 (思想史)

Takaaki Yoshimoto and Hideo Kobayasi

Kazuyasu WATANABE

Department of Social Studies (Intellectual History), Aichi University of Education, Kariya 448-542, Japan

## I 敗戦直後の模索

『初期ノート』のために書かれた自作解説「過去についての自註」のなかの、戦後について語り始める部分で、吉本は次のように書いている。

戦後、わたしは、どんな解放感もあたえられたことはない。聖書があり、資本論があり、文学青年の多聞にもれず、ランボオとかマラルメとかいう小林秀雄からうけた知識の範囲内での薄手な傾斜があり、仏典と日本古典の影響があつた。戦争直後のこれらの彷徨の過程で、わたしのひそかな自己批判があつたとすれば、じぶんの世界認識の方法についての学に、戦争中、とりついたことがなかつたという点にあつた。(『吉本隆明全著作集』——以下『全著作集』——第15巻, 464頁)

聖書、資本論<sup>(1)</sup>、小林秀雄、仏典、日本古典等々——ここに、戦後を迎えるにあたって吉本のうちに残された知的蓄積の数々が列挙されている。

しかし、その賢治論はやがて放棄される。賢治論の放棄は、吉本における保田與重郎の影響の放棄を意味した<sup>(2)</sup>。戦中期の教養がしだいに剥落していく過程の中で、吉本は小林秀雄への傾斜を深めていく。

『国文学解釈と鑑賞』1956年11月号に掲載された吉本の「小林秀雄の方法」の冒頭近くに、次のような記述が見える。

わたしは、戦争中、小林秀雄の熱心な読者であった。敗戦直後の混迷のなかで、この文学者の声はもっともききたい声のひとつだったが、聞きえなかったという記憶をもっている。(『全著作集』第7巻, 246頁)

ここで回想されているように吉本は、小林秀雄をもっとも信頼すべき思想家の一人として、その発言を心待ちにしていた戦後の一時期をもっていたのである。

吉本は戦前期において既に小林秀雄の大きな影響を受けていた。その淵源を辿れば、米沢高等工業学校時代にまで遡る。それは、私塾教師今氏乙治の影響を離れ、読書によって自らの思索を展開し始めた時期にあ

たっていた。

また、敗戦の気配の濃厚になった1945年に制作されたと推定される「宮沢賢治序叙草稿第四」の末尾近くで、宮澤賢治の死について描写しながら、吉本は、

私は何とも言はれない悲しみを感じながらこの筆を断たねばならない「偉大な思想ほど亡び易い」と言つた「ドストエフスキーの生活」の著者の言葉は実感である (331~2頁)

と記している。ここで引かれているのは、1939年5月に創元社から出版された小林秀雄の『ドストエフスキーの生活』のつぎのような一節である。

従つて次の事はどんなに逆説めいて聞えようと真実である。偉大な思想ほど亡び易い、と。亡びないものが、どうして蘇生する事が出来るか。亜流思想は亡び易いのではない。それは生れ出もしないのである。(『全集』114頁)

戦争の最中であつて、吉本が小林の著書を熱心に読んでいたことを証するものである。

## II 「詩と科学との問題」

吉本が本格的に評論活動を開始するのは、敗戦から3年あまりを経た1949年に入ってからのものであつた。吉本はこの年、『詩文化』の2月号に「詩と科学との問題」、8月号に「ラムボオ若くはカール・マルクスの方法に就ての諸註」、そして11月号に「方法的思想の一問題——反ヴァレリイ論——」という3本の評論を掲載している。

吉本は『詩文化』1949年2月号に掲載された第1の論稿「詩と科学との問題」を以下のように始めている。

一九四五年であつた。当時僕は科学への不信と自らを決定し得ない為の衰弱的な自虐とで殆ど生きる方途を喪つてゐた。暗い図書館の中に虫のやうに閉ぢ籠つて数学の抽象的な世界に惑溺しながら、僅かに時間を空費してゐたのである。(『全著作集』第5巻, 5頁)

前の年の12月に米沢工業専門学校を繰り上げ卒業になり、吉本は4月、東京工業大学電気化学科に入学したが、5月、在籍のまま徴用動員のため富山県魚津市

日本カーバイトの工場に出向き、そこで敗戦の日を迎えることとなった。

1945年夏、吉本は東京に帰ってはきたが、GHQが工科系の大学を廃止するなどという噂が流れたりもして、東京工業大学ではほとんど授業は開講されなかった。一時、母親の疎開先である福島県須賀川の農家に滞在するなど、不安定な状態にあった。時々、まだ開校されていない大学に様子を見にいったという。

そのような荒廃した大学の構内で、数学の遠山啓による「量子論の数学的基礎」という自主講座が開講されていた<sup>(3)</sup>。

そんな時であった。偶然な機会が僕を或る教室に運ばせた。僕は其処で遠山啓氏に出会ふことが出来た。あの〈量子論の数学的基礎〉なる講義は僕に異様な興奮を強ひた。最早動かすものもありはしないと思はれた僕の虚無が光輝をあげた殆ど唯一度の瞬間であった。(中略) 数学の認識的基礎を根底から脅威したと言はれるカントルの集合論に出会つたのは確か秋のことであった。僕は今でも遠山氏の辛い面持ちと重たい口調をを想ひ浮べることが出来る。(同、5～6頁)

東工大構内で開講された遠山啓の自主講座に出席したことがきっかけとなって、それまで閉じ籠もっていた「数学の抽象的な世界」を脱出することができたと吉本は語る。

おそらく、プランク、ボーア、ハイゼンベルクという量子力学の発展が、不確定性原理を提起することによって、それまでの物理学の基礎を根柢から揺るがしたのと、同じくカントルの集合論が無限という概念に濃度という要素を導入することで、それまでの数学の体系を根柢から揺るがしたこと、それらの事実が、吉本の自然科学にたいする認識を一変させたものと思われる。

この論稿の冒頭部分は、これより2年前、『展望』1947年3月号に発表された、小林秀雄の戦後の復活を印象づけた評論「ランボーⅢ」の書き出しの部分を意識したものとなっていることを指摘することができる。

吉本が小林の「ランボーⅢ」を発表直後に読み、深い印象を受けていたということは、さきに引いた「小林秀雄の方法」において吉本が「わたしの記憶のなかでは、かれの戦後の第一作は「ランボオ論」か、「モオツアルト」論で、このあとに「罪と罰」論がつづく」と語り、「これらのいずれも、勝手につくりあげていた小林秀雄像にそむかないでさばえであった」と続けていることから確認することができる。(前掲、247頁)

小林の「ランボーⅢ」は以下のように始まる。

僕がはじめてランボオに、出くはしたのは、廿三歳の春であった。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いてゐた。と書いてもよい。向うからやつて来た見知らぬ男が、いき

なり僕を叩きのめしたのである。(『小林秀雄全集』第9巻、105頁)

小林はつづいて、ランボーに出会うまでの自らの状態について次のように描写する。

当時、ボオドレエルの「悪の華」が、僕の心を一杯にしてゐた。と言ふよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉ぢ込められてゐた、と言つた方がいい。(中略)

確かに、それは空前の見ものであつたが、やがて、精緻な体系の俘囚となる息苦しさといふものを思ひ知らねばならなかつた。実際この不思議な球体には、入口も出口もなかつた。(同、106頁)

そのような閉塞状況から小林を救い出したのは、ランボーとの出会いであった。それがもたらした衝撃について小林は以下のように記している。

さういふ時だ、ランボオが現れたのは。球体は碎けて散つた。僕は出発する事が出来た。何処へ——断つて置くが、僕は、過去を努めて再建してみたまでだ。(同、106～7頁)

以上のような小林の記述の一連の流れは、「一九四五年であつた」「暗い図書館の中に虫のやうに閉ぢ籠つて」「僅かに時間を空費してゐた」、集合論との出会いは「僕の虚無が光輝をあげた殆ど唯一度の瞬間であつた」という、さきの吉本の叙述の展開と正確に対応している。吉本にとっての「量子論」や「集合論」は、まさしく小林における「ランボー」に当たっていたのである<sup>(4)</sup>。

こうして両者を比較してみると、吉本が、敗戦直後の混乱に充ちた時期に、遠山啓の自主講座に出会うことによって、それまでの閉塞状況を突破することができたという経過を語るについて、小林秀雄の文章を手本にしたということは明白であるように思える。それは、おそらくこの時期、吉本にとって小林秀雄が手本とすべき唯一の思想家であつたということの意味するであろう。

このち吉本は「やがてそれは僕が応用の場から純粋理論の場へ歩み寄る門出の誘ひであつた」と続ける。これは冒頭の「暗い図書館の中に虫のやうに閉ぢ籠つて数学の抽象的な世界に惑溺し」ていたという発言といささか齟齬しているように見える。

この齟齬は、おそらく、出来事があつた1945年当時と、この文章が書かれた1949年との間のタイムラグに由来するものであろう。1945年当時の鬱屈した状態では、内閉的な空間の中に自閉してたと感じられたものが、1949年の段階で振り返ってみたとき、それは応用科学の領域から純粋理論の領域への脱出であつたと思ひ知らされたのである。ここで言う純粋理論とは文学批評をも含むものと考えていいだろう。

応用化学を専攻することが、小さな船大工屋の棟梁であつた父親の跡を継ぐ意志を意味したとすれば、そ

れを放棄し、実用のためには直接的に何の役にも立たない「純粋理論」へと歩を進めることは、父親を含めて東京下町の伝統からの訣別の意志を示すものであったと言えるだろう<sup>6)</sup>。

以上のような序論につづいて、吉本は「詩と科学との問題」を次のように展開する。

今日批評家達が不用意に用ひてゐる科学性といふ言葉の概念は実は単一の論理性といふ概念の代言に外ならないので、事実科学の領域が提示する科学性といふ言葉の意味は複雑多葉な問題を生起しながら、僕を果てしない迷路の方へ押し遣るやうである。(前掲、7頁)

これは、もちろん、冒頭に示された、量子論や集合論の出現によって、自然科学や数学の世界に革命的な転換が生じたという議論から導かれたものである。

そしてさらに吉本は、

この辺りで僕には文学と科学との問題が共通の領域で立現はれるのだが、どうも解き明かす術もない複雑な感懐を伴つて来るやうである。何故に僕達は書くといふ単純な原始的な操作を保存しなくてはならないのか。これは幼稚な疑問だが、斯かる疑問に一度も出会ったこともない様な詩人が、詩の社会性とか詩の科学性とかを論じてゐる様は僕には果敢ないことのやうに思はれる。(同、9頁)

として、ようやく真のテーマへと辿りつくのである。

文学の科学性あるいは社会性というテーマは、昭和戦前期において、マルクス主義を受け入れた文学者たちが提起してのち、これを受けるかたちで平林初之輔の提起した「芸術的価値と政治的価値」論争に関わって、プロレタリア文学陣営と芸術派の人たちとの間で激しく取り交わされた議論を意識したものである。この論争において小林秀雄は芸術派の論客として華々しくデビューし、華々しく活躍したのであった。そして吉本は、そうした小林の活動に深く印象づけられるところがあった。

小林の「ランボーⅢ」のモチーフの背景に、

進歩的と自称する政治思想、人間的と自称する小説形式、歴史や認識の運動の解明者と自称する講壇哲学、さういふものが寄つてたかつて、真正な詩人の追放の為に協力してゐる。言語表現は、あたかも搾木にかけられた憐れな生物の様に吐血し、無味平板な符牒と化する。言葉といふものが、元来、自然の存在や人間の生存の最も深い謎めいた所に根を下し、其処から栄養を吸つて生きてゐるといふ事実への信頼を失つては、凡そ詩人といふものはあり得ない。(前掲、125頁)

というように、マルクス主義勢力によって制覇された戦後文壇に対して、詩的な言語を防衛しようとする意図が示されている。そして、吉本が小林の議論に惹きつけられたのも、その点にあったのである。

しかし、ここで、同一の問題を論じながら、吉本と小林との間に、モチーフ上の大きな裂け目ともいうべ

きものが顕わになる。

小林にとって、ここで語られるランボーとの出会いは自らの人生における重大事であり、つまりそれはすでに過ぎ去った過去の物語である。これに対して吉本にとって遠山啓との出会いは、今現在の全く見通すことのできない時代の状況との関連において語られている。つまりそれは、これから対決すべき未来の課題として意識されている。ここに決定的な違いがある。ここに、吉本の議論のアクチュアリティがある。そしてそこに、はっきりとした小林秀雄に対する吉本の批判的な眼差しが示されているのを知ることができる。

### Ⅲ 「ラムボオ、マルクス論」

戦前期においてマルクスの思想を最もよく理解していたのは小林秀雄であったと言っても過言ではあるまい。小林は生半可なマルクス主義に対しては厳しい批判を繰り返したが、マルクスの思想そのものに対しては深い理解と同情を示した。

吉本は戦中期においてすでに、そうした小林の議論をとおしてマルクスの思想を学んでいたふしがある<sup>6)</sup>。1945年秋から冬にかけて執筆されたと推定される「無門関研究」と題する論稿が残されている。この文章に、

(マルクスを見給へ 今も尚みんな血を流して読んでゐる 読まれてゐる マルクスだつて必ず地下で十字架以上の苦しみを耐えてゐるのだ このマルクスの秘めた苦しみを知らないマルキシストはみな人形である) (『全著作集』第15巻、180頁)

という部分がある。

小林秀雄の評論家としてのデビュー作、『改造』1929年9月号に掲載された「様々なる意匠」のなかに次のような一節が見える。

若し、卓れたプロレタリア作家の作品にあるプロレタリアの観念学が、人を動かすとするれば、それはあらゆる卓れた作品が作品が有する観念学と同様に、作品と絶対関係に於いてあるからだ、作者の血液をもつて染色されてゐるからだ。(『新訂小林秀雄全集』第1巻、16頁、新潮社)

マルクスの著作が人々を動かすのは、そこに込められたマルクスの情熱であり、プロレタリア文学が人々を動かすためには、ただマルクスの理論を形式的に援用するだけではなく、作家自身の情熱がそこに込められていなければならないと小林は言うのである。吉本の「無門関研究」における「血を流して」というフレーズ、が小林の「血液をもつて染色されてゐる」に由来するものであることは疑いあるまい。

また、同じ吉本の発言に見える「マルクスの秘めた苦しみを知らないマルキシストはみな人形である」という部分にも、安易なマルクス主義者たちが図式や概念によって歴史を捉えることを批判する、『改造』1932

年6月号所載の「現代文学の不安」や『改造』1941年3月号所載の「歴史と文学」などにおける小林の議論が反映されているように見える。この時期、小林はほとんど文章を公表していないから、その影響は戦前期の小林の発言に由来するものであることは疑いあるまい。

敗戦後、吉本は本格的にマルクス主義の研究に取り組むようになるが、マルクス理解の入口となったのは小林秀雄であり、その影響を長く引き摺っていたように見える。そうした小林の影響からの脱却の試みが、「詩と科学との問題」に続く第2の論稿、『詩文化』1949年8月号に掲載された「ラムボオ若くはカール・マルクスの方法に就ての諸註」——以下「ラムボオ、マルクス論」——に記録されている。

小林のマルクス論の基本は、マルクスをそのイデオロギー的な装飾から切り離して、『資本論』の作者として、ダンテやゲーテやトルストイと同列において評価するところにある。それは、例えば『文藝春秋』1931年2月号に掲載された「マルクスの悟達」のなかの以下のような文章のうちによく現れている。

マルクスは社会の自己理解から始めて、己れの自己理解を貫いた。例へばドストエフスキはその逆を行つたと言へる。私の眼にはいつもかういふ二人の達人の典型が交錯してみえる。(『小林秀雄全集』第1巻、109頁)

吉本は、マルクスとランボーを同一の視点から論ずる「ラムボオ、マルクス論」を次のように始める。

マルクスの経済学批判としての資本論は、商品の分析を以て始まるのではない。斯の不世出の名著は科学である。経済解析の背後に無類の形式を持つた確信と情熱とを秘めてゐる。併して粉飾されない精神のみが自ら最適の理解の方法を編み出すだらう。僕の資本論への理解は、マルクスの情熱と方法との相関の場に対する僕の解析から始まる。(『全著作集』第5巻、12頁)

河上肇の「唯物史観」研究として始まった日本のマルクスの理論の本格的な研究は、その後、福本和夫や三木清によって哲学的な深みが増えられたが、主流となった講座派の理論に見られるように、歴史の経済学的解釈という理解が一般的であった。そうしたなかで、マルクスの思想の検討において、その経済分析の諸相を分析したりイデオロギー論を検討したりする以前に、「情熱」という概念を持ち出すのは、決して一般的なことではあるまい。ここには明らかに小林秀雄の影響を見てとることができる。

さきに引いた「様々な意匠」において、小林は、ボードレールを、バルザックを、スタンダールを、マラルメを、そしてマルクスを論じた。そのさいキーワードとなったのは、「情熱」という言葉であった。

マルクスは詩人を、その「資本論」から追放した。これは決して今日マルクスの弟子達の文芸批評中で、政治といふ偶像と芸術といふ偶像とか、価値の対立に就いて颯

鼠ごつこをする態の問題ではない。一つの情熱が一つの情熱を追放した問題なのだ。或る情熱は或る情熱を追放する、然し如何なる形態の情熱もこの地球の外に追はれる事はない。(前掲、15頁)

この少し後に「プロレタリアの観念学が、人を動かすとすれば」それは「作者の血液をもつて染色されてゐるからだ」というフレーズが続き、さらに、

若しこの血液を洗ひ去つたものに動かされるものがあるとすれば、それは「粉飾した心のみが粉飾に動かされる」といふ自然の狡猾なる理法に依るのである。(同、16頁)

と述べられる。

ここで直ぐに眼に付くのは、吉本の「粉飾されない精神のみが自ら最適の理解の方法を編み出すだらう」という発言が、小林の「粉飾した心のみが粉飾に動かされる」というフレーズから導かれたものであるという影響関係である。また吉本の「血液」という言葉も小林の「様々な意匠」に由来するものであることは明らかであろう。作者の「情熱」つまり「血液」が作品のうちにどれだけ浸透しているかどうかの問題であるというのである。優れたプロレタリア文学すなわちマルクス主義文学があるとすれば、それはあらゆる優れた芸術と同じように「作者の血液をもつて染色されて」いなければならないという主張は、ここから導かれたものであった。このような観点から、小林は、マルクスの『資本論』は、ボードレールやバルザックの作品と同じように、マルクス自身の「血液」によって浸透されているすぐれた作品であると論じたのである。

つづいて吉本は『資本論』の「序文」に引用されたダンテの格言「汝の道を進め、而して人々を彼等の言ふに任せよ！」に触れて以下のように述べる。

恐らくここに資本論といふ彼の経済学批判の方法的出発点がある。勿論斯かる格言は、而してそれを引用してゐるマルクスの精神は少しも理論としての性格を有たない。彼の不動の確信に貫かれた唯物弁証法なる方法論を、彼が最後までたどる忍耐を惜しんだならば、唯の空虚な放言に過ぎなくなるのである。だがあらゆる真正の思想の根柢には常に理論の形式を取らない斯様な勇躍の表象を見出すことが出来る。(12頁)

この部分では、小林秀雄の「マルクスの悟達」が参照されている。その中で小林は、吉本と同じように、『資本論』の「序」に引用されたダンテの言葉に触れている。

マルクスが「資本論」を書く時に経済学の方法などといふものは自明な事に属した。二千頁をこえる書物を書くにあたって、「お前の道を進め、人には勝手な事を言はせておけ」といふダンテの格言に終る四頁の序文で事は足りた。方法論の正しさはたゞ内容のみが明かしたのだ。(前掲「マルクスの悟達」105～6頁)

吉本はもちろん、マルクスの原典に直接当たったであろうが、それを読みながら、おそらく小林の言葉を思い出していたに違いない。少なくとも吉本は、『資本論』よりもさきに、小林の論稿を読んでいたはずである。両者は、『資本論』に記述された経済学の方法よりも、そこに示されたマルクスの強い精神のありように評価の基準を置いている点で共通している。

小林は、同じ論文の少し前で、

こゝに何んとしても言いたい事は、弁証法的唯物論といふものは成程最近書物の上に現れた理論に相違なからうが、その真理は世の創めと共に古く人はこの理論の真実を書物から学ぶことは出来ぬものといふ事である。この理論は見事な人間生活の規範である。だが、物指ではないといふ事だ。(同、102頁)

と述べている。さきの吉本の「あらゆる真正の思想の根柢には常に理論の形式を取らない斯様な勇躍の表象を見出すことが出来る」という断言は、小林のこの発言を踏まえたものと考えられる。

それに続く吉本の、

が原則的真理なるものは真理である限りに於て、人を納得せしめるだらうが、決して人を動かすことは出来ない。真理は唯情熱の形式を以て貫かれたとき始めて人を動かすのである。(前掲、13頁)

という言葉には、小林の「様々なる意匠」における、次のような叙述が反響しているように思われる。

卓れた芸術は、常に或る人の眸が心を貫くが如き現実性を持つてゐるものだ、人間を現実への情熱に導かないあらゆる表象の建築は便覧に過ぎない。(中略)人は便覧によつて動きはしない、事件によつて動かされるのだ。(前掲、16頁)

「理論」ではなく「情熱」が「人」を「動」かすという全体の論調が共通している。

「剰余価値」「商品」など『資本論』の経済学の方法論について解説した後、吉本は、

マルクスの方法と思想との本来的性格は実践思想としての性格である。実践思想とは実践出来得る思想ではなく、実践を表現してゐる思想だ。故に斯かる思想を実践するためにも自己自身と闘ふに要すると等価な苦痛が必要なのだ。即ちこのやうな苦痛は意志と情熱との行使において生ぜねばならぬ筈だ。(同頁)

として、再び「情熱」の問題へと還ってくる。

僕が不得手な経済学の諸概念を通じて獲たかつたものはマルクスにおける方法と情熱との相関、換言すれば思想と人間との相関と両者の明晰な分離とに外ならなかつた。資本制社会の機構を分析するマルクスの方法は弁証法的力学に外ならないが彼の着眼を規定するものは生々澁刺たる愛憎の原理である。(16～7頁)

ここに「生々澁刺」とあるのは、明らかに小林秀雄の用語を踏まえたものである。小林は「様々なる意匠」において、マルクス主義の主張する科学的批評と既成

文壇の所謂印象批評とを同時に批判する立場から、「常に生き生きとした嗜好を有し、常に澁刺たる尺度を持つといふ事だけが容易ではないのである」と論じた。

(前掲、12頁)これを吉本は援用している。

そして、ここで注意されるのは、これが単に小林の影響ということを超えて、たとえば戦前期において文壇を賑わせた、政治的価値と芸術的価値という問題について、まだ決着が付かないまま、戦後が過ぎていくのではないかという、吉本の思いがそこには込められていることである。つまり小林の問題意識を受け継ぐことによって、人々が解決済みのような顔をしてやりすごしている問題に対して、吉本は、もう一度それを俎上に上せ、戦後の抱える問題を根源的に明らかにしようとする意図が込められていたのである。

以上のように、吉本のマルクス理解のうちには、戦前期の小林のマルクス理解が踏まえられていることがわかる。しかし、たとえば、

マルクスが資本論なる膨大なる著述を為すに当つて、彼の資本制社会変革に対する情熱と、その方法的帰結とは自明の前提として存在したのである。斯くして彼は唯この方法と情熱とか以て、社会の表層を流通する経済現象を分析すれば足りたのである。(前掲、13頁)

という吉本の記述を見るならば、吉本にとっての「情熱」という言葉のうちには、「資本制社会変革に対する情熱」というように、政治的な実践という意味が強く込められているように思われる。この点は、もっぱら文学的な文脈で使用されている小林の「情熱」とは大きく異なっている。小林秀雄においては、作品解読の原理であったものが、吉本においては、実践の問題となるのである。

つぎに吉本は、マルクス主義と芸術の関係にかかわって、以下のように論ずる。

懐疑は単に懐疑としてとどまる限り、何ら積極的な生存の原理とはならぬ。だがこれを歴史と現実とに対する不信の表現と解するならば孤独のうちに闘はれる宿命の理論の形式に外ならぬ。斯かる形式が所有する苦痛と困難とは、虚無といふ一つの場を得て止揚される。それ故虚無とは確信の困難な持続を指すので、断じて敗北の意味を成さぬ。あらゆる思想は虚無を脱出する所に始まるのかも知れない。(17頁)

「宿命」の語は小林の「様々なる意匠」の中の重要なキーワードのひとつである。小林は其中で「血球と共に循る一事実とはその人の宿命の異名である」あるいは「作者の宿命の主調低音」あるいは「創造の理論とは彼の宿命の理論以外の何物でもない」などの言葉をとおして、文芸批評の根本的なモチーフとして「宿命」という概念を提起した。それはすべてを客観的な状況から帰納しようとするマルクス主義にたいする批判の根柢であった。それを吉本はここで肯定的に受け入れる。

しかし、ここで吉本は、小林に由来する「宿命」という言葉にかんして微妙な読み替えを行っている。「宿命」とは「歴史と現実とに対する不信の表現」であり、そこに生まれる「苦痛と困難」は「虚無」という場において「止揚」されると吉本はいう。いわば小林にとって「宿命」は個人的なものである。これにたいして、吉本にとってそれは「歴史と現実」つまり時代の状況とかかわるものであった。

吉本は次のように続ける。

だが虚無の場からする抵抗の終る所に宿命の理論はやむのである。宿命の理論のやむ所に、芸術の思想もまた終るのである。斯かる芸術の本来の意味は、マルクスの所謂唯物史観なるものの本質的原理と激突する。この激突の意味の解析のうちに、僕はあらゆる詩的思想と非詩的思想との一般的逆立の形式を明らかにしたいのだ。(同頁)

この部分は、小林の「様々なる意匠」に付された、「懐疑は、恐らくは叡智の始めかも知れない、然し、叡智の始る処に芸術は終るのだ。／アンドレ・ジイド」というエピグラムをパラフレーズしたものととして読むことができる。小林は、分析の必要性和分析によって失われるものとの関係を、有名な一句「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事ではないのか！」と表現した。吉本は小林の立場を肯定し、すべてを環境から演繹しようとするマルクス主義の立場を否定する。と同時に、吉本はマルクスの理解とは別の形で、思想と時代との新しい関係を再構築しようとはかっているのである。

ところで「虚無」の語は小林に由来するものではない<sup>(7)</sup>。「虚無」の語は、ここで吉本が第一論文「詩と科学との問題」冒頭で触れた、遠山啓の自主講座に出会って「僕の虚無が光輝をあげた」瞬間へと話題を回帰させていることを示すものである。この個人的な体験こそが「芸術」の出発点であり、小林のいう「宿命」の意味するものであり、マルクス主義が捉え損なったものである。それが「虚無」という概念の核心であった。

これに続いて吉本は、マルクス主義を信奉する者が、自らのみを真理と主張し、他の思想を排斥することを誤りであると論じている。

大凡真正の思想は、立脚する基礎に次元の差を含むとして一の思想が一の思想を思想的根拠の上に立つて放逐するといふことは、滑稽事に過ぎない。思想が思想を放逐するのは情熱が情熱を放逐するといふ、人間性相互の一般の原則に外ならないので、真理が非真理を放逐する形式ではない。況んや進歩の仮構が反進歩の仮構を放逐するなどとは、嗤ふべき愚劣事に過ぎない。(17頁)

ここに展開された議論は、小林の「様々なる意匠」のなかの、「マルクス主義文学」について論じた第3章の冒頭部分の、

ギリシアの昔、詩人はプラトンの「共和国」から追放さ

れた。今日、マルクスは詩人を、その「資本論」から追放した。これは決して今日マルクスの弟子達の文芸批評中で、政治といふ偶像と芸術といふ偶像とが、価値の対立に就いて鼯鼠ごつこをする態の問題ではない。一つの情熱が一つの情熱を追放した問題なのだ。或る情熱は或る情熱を追放する、然し如何なる形態の情熱もこの地球の外に追はれる事はない。(「様々なる意匠」15頁)

という部分を踏まえたものになっている。「或る情熱は或る情熱を追放する」というフレーズがそのまま援用されている。

吉本は、つづいて、思想家マルクスと詩人ランボーを「情熱」という観点からともに肯定して、思想家マルクスと詩人ランボーを対比するという課題へと突き進む。

例へば僕の内部には現在アルチュール・ランボオなる詩人とカール・マルクスなる思想家とが別に奇妙な感じもなく同在してゐるが、ランボオなる詩人はマルクスをマルクスが人間であるといふ単純な理由で、あの孤独な痛烈な罵詈雑言を以て一東にして嘲弄することをやめないだらう。マルクスはランボオが詩人といふ愚劣な空想家であるといふ理由で、ランボオの考へても見なかつた生産とか交通とかいふ諸概念を以て極めつけることをやめないだらう。何れの思想が真理であるか。そんな問ひはナンセンスだ。(17頁)

吉本は、マルクスとランボーを、ともに固有の価値をもつものとして肯定し、「だが今日日本の政治詩人諸君は斯かるナンセンスを遣らうとしてゐないのではないか」と警告する。「政治詩人」とは、戦後復活した、あるいは、装いを改めて再登場した、プロレタリア詩人たちのことであろう。

吉本は、戦前期において戦われた「芸術的価値と政治的価値」論争になんの決着をもつけないまま、敗戦という事実がすべてを解決したかのようなかたちで、すでに小林秀雄によって徹底的に否定されたはずのプロレタリア詩人たちが復活してくることに苛立っているのである。というよりも、戦前の思想的な課題が何ら議論されないままに、なにごとにもなかつたかのように通り抜けられることに苛立っているのである。

ここで吉本は、マルクスの思想を解説し、

彼は該博な知識と透徹した史観を以て人口の増加と個人相互の交通と生産手段との発展様式の追究のうちに人間史への方法を確立するのである。此のやうな彼の歴史的現実への把握過程が次のやうな彼の革命への決意となつて表現されるのは必然である。(18頁)

と評価した上で、このような現実把握がマルクスにとって「革命への決意」となるのは「必然」であつたと語り、「日本の亜流」に言及する。

今日、日本のマルクス主義者諸君は何故に自らの意識のうちに、社会の意識を即ち社会の生存機構を探求するといふ苦痛を放棄してしまふのか。何故に単なる楽道家と

化してしまふのか、僕には解せない処である。(同頁)

ここでの「社会の生存機構を探求するといふ苦痛」とは、さきに「虚無」との関連において言及された「苦痛と困難」のこと以外のものではあるまい。これに続く、

真正な思想は常に尺度を以て規制されるには余りに微妙なものだ。斯かる尺度を以てマルクスの思想的体系を測定するとき形骸だけが諸君の脳裏に落ちるのは自明である。マルクスにおける情熱と方法、換言すれば人間と思想との微妙な色合ひは尺度を洩れるだろう。科学的なる名のもとに斯かる色合ひを抹殺することは断じて許されないのである。(19頁)

という記述を見るならば、吉本の言う「亜流」という言葉が、「ランボーⅢ」における小林の、

亜流といふものは皆さういふものであるが、彼等には、ランボオがこの為に払つた代償が解らなかつた。彼等は、ランボオから詩形の異様な錯乱を受取り、その真の動機と内容とを置き忘れて来た。(前掲、110頁)

という発言を受けたものであることは疑いあるまい。深読みすれば、この「亜流」という言葉は、それまでの自らの立場に対する、小林の「亜流」であったという痛切な反省が含まれていたと考えることができる。吉本は、自らと小林との距離を測りつつ、彼我の関係を考察した結果、小林の思想の本質を掴み取り、それを自らの言葉によって表現しようとしたのである。

しかし今では、吉本は、はっきりと自らと小林との違いを自覚している。小林の場合「情熱」と「尺度」の対比は批評の方法に関わっている。これに対して吉本の場合、それは「革命」という実践との関わりにおいて論じられている。

ここで一度だけ出現する「革命」という語は、おそらく、政治的なものではない。吉本が、小林に欠けていると思われる、現状に対する能動的な働きかけを漠然と、このような言葉で表現したのであろう。「革命」の観念は、その後必ずしも全面的に展開されないまま論は終結する。おそらく、この時点で吉本には、「革命」という概念についての具体的な構想を展開する準備がまだできていなかったのである。

「虚無」の概念は次の第三論文へと受け継がれる。

#### Ⅳ 「反ヴァレリー論」

『詩文化』1949年11月号に掲載された第3の、そして最後の論稿「方法的思想の一問題——反ヴァレリー論——」——以下「反ヴァレリー論」——は、まさしく自らと小林秀雄との距離を確かめようとする三部作の総決算であり、これまでに深い影響を受けた小林に対する訣別の書であったといつてよい。ここにおいて、吉本は、はじめて、自らの独自の道を模索することが可能になったのである。

おそらくポール・ヴァレリーの名前は、吉本にとつ

て小林秀雄の代名詞であった。

吉本は先行する二つの論考において、小林秀雄と自らの距離を測り、小林の思想を反芻しつつ、そこに微妙な齟齬の感を吐露してきたことはすでに指摘した。二月号掲載の「詩と科学との問題」において、それまで閉じこめられていた自閉的な空間から集合論や不確定性原理を導きとして脱出することのできた経緯を描き、そして八月号掲載の「ラムボオ、マルクス論」において、マルクスの思想の可能性について語ったが、その先の、新しい方向性については、これまでに何も語ってはいなかった。しかも吉本は、これらの論稿において自らが大きく小林秀雄に依拠していることを強く意識しており、それを克服しなければ、そこからさきに進むことのできないことを強く自覚していたのである。このようにして小林と自らのあいだに横たわる異和の感情ににだいにかたちを与えてきた吉本は、ついにこの第3の論考において、あえて真正面から小林批判を展開するに至るのである——ポール・ヴァレリー批判として。

それは吉本にとって、論理的問題というよりも、戦中戦後をつうじての自らの個人的な体験を対象化し、自らの胸内にわだかまる渾沌とした思いに、明確な表現を与えることができるかという問題であった。

1947年9月に東京工業大学を卒業した吉本は、「電線の塗装をする町工場」をはじめ、化粧品や石鹼の原料を扱う「ラブミー化粧品」の実験室、鍍金工場などを転々とするが、「疲れはてて」1949年3月に、「特別研究生」として東京工業大学にまい戻った。(「年譜」)「休職」そして大学院への進学は、それまでの1年半の社会生活を反省し思索する余裕を与えてくれた。

まさしく、この一連の論稿は、吉本にとって、自らの戦中戦後の体験がある普遍的な場へと開く試みであったと言える。

吉本は自らの「反ヴァレリー論」を次のように始める。

ポオル・ヴァレリイと呼ばれる方法的思想の一事件に何らかの結論を与へようと思ひ立つたのは一年程前のことである。当時、僕は怠惰を弁護する二つ程の理由を設けて敢て手がつけやうとしなかつたのであつた。出遇の当初からこの人物が何者かであるといふよりも何者でもないと思ふことにより多くの興味を覚えてゐたので、彼の方法こそ彼の思想であるといふことを固く信じてゐた。即ちポオル・ヴァレリイとは方法の名だ…… (24頁)

吉本がヴァレリー批判のために費やした「一年」とは、まさしく小林との距離を測り、小林の思想を検討し、自らの独自の立場を打ち立てるために必要な時間であった。

戦争中における集団のロマンチズムは僕に異常な不信を強ひたのであつた。純粹自我の完閉体にとちこもつて、それら半ば強圧的な半ば無意識的な圧力に対して、僅か

に武装した。あらゆることに易々として従属したが、自我の内部世界が侵されるや昂然として反撥した。今や傷は深く思へば傷むことばかりである。僕は自我以外のものを何も信じなかつた。(25頁)

一連の論稿の最初のものである『詩文化』の2月号所載の「詩と科学との問題」の冒頭部分で語っている「虫のやうに閉ち籠つて」いた空間とは、まさしく、ここで言う「純粹自我の完閉体」であり、つまりそれは、なかば強制的になかば無意識的に圧力を加えてくる軍国主義的な社会体制から「自我の内部世界」を守るための「武装」だったと吉本は言うのである<sup>(8)</sup>。

そして戦後。

やがて集団のロマンチズムは集団のリアリズムに替る。僕は少しも平和の感懐を持つことが無かつたのである。その上経済上の世界恐慌の余波を大きな深刻度を以て間接的に受けながら、しかも世界経済の場から取残されるといふ不当な立場が僕たちを強ひてゐるやうに思はれる。或る種の努力に助長されて集団のロマンチズムは甦りつつある……(25頁)

戦前のファシズム的な圧力と同質のものと思われる集団の圧力が、別の形で戦後再び甦るのを感じたと吉本は言うのである。「過去についての自註」で「戦後、わたしは、どんな解放感もあたえられたことはない」(前掲、464頁)と吉本が言うのは、このような意味をも含んでいたものと思われる。

戦争が終わったのちにも吉本が感じざるをえなかつた、戦中と同じような、なかば強制的で、なかば無意識的な圧力とは、いったいなにか、ここでは明確に語られていない。それには戦後の国家権力という意味も含まれていたであろうし、また、吉本自身が短い組合運動の中で体験した、左翼勢力内部における党派間の争いという要素も含まれていたと思われる。しかしそれ以上に、日本人の権力迎合性といった根源的な問題が存在していたのである。

いずれにしても、戦争が終わって平和になったというような単純な認識では現在の状況を語ることはできないということだけは吉本にとって明確であった。このような個人的な感情、あるいは体験を、普遍的な論理の中で開いていくことが、吉本の課題となつたのである。それは、戦前、戦後という断絶を越えた、もっと根源的な問題であった。

戦前の問題でもなければ、戦後の問題でもない、戦前と戦後を共通して日本の思想空間に孕まれる問題——このような問題意識に到達したとき、吉本の内部に、新しい問題の立て方が見えてきたのではないだろうか。

吉本は、敗戦後のこうした自らの状態を「虚無」と呼ぶ。

生きてゐる状態とは疑はしい状態である。(中略)だがどうやら僕は疑はしい状態を生きつづけて来たわけだ……

この疑はしい状態の又の名は虚無と呼ぶにふさはしいやうに思はれる。(26頁)

「虚無」の語は、第1論文で2箇所、第2論文で4箇所、そしてこの第3論文では8箇所登場する。このように、後になるに従って増加していく。

吉本は「虚無」という観念についてさらに具体的に記述する。

虚無とは意識の野における単純意識状態束の一定の部分が如何なる感覚又は感情の強度の変化によつても変化を受けない状態である。この原因は全く個別的であり得るとして全てこのやうな状態を以て説明される。今任意の原因の漸次的な蓄積によつて意識の単純状態束は漸次的に大なる強度の同じ色合に充される。併してこれは虚無領域における変化を受けない単純状態束と平衡してゐるわけである。原因の蓄積量が、虚無状態束の強度を超えるや突如として未変化単純束は同じ色合の他の状態束と同一状態となる。(26頁)

ここにしだいに蓄積していった漠然とした異和の感情が、一挙に爆発し明確な形を取り始めたことが語られている。

このやうな理由のなかで僕は常識——つまり人々が無意識のうちに結んでゐる連帯性を決定的に疑ふといふ極度の性癖を獲たのである。僕はポオル・ヴァレリイを常識の範疇に叩き込んで扼殺してしまつた。この巧まざる政治家、精緻な常識家……(25頁)

ここで言う「人々が無意識のうちに結んでゐる連帯性」という意味での「常識」とは、後の吉本の言葉で言えば「共同幻想」ということになる。これはその前期的な形態といふことができる。

のちに吉本は次のように語っている。

小林秀雄はとても間近まで古典の作品や人物や歌をもつてきて、そのイメージをはっきりさせたという功績があると思います。

それで何が不服かという、戦争の体験も含んで、僕らのいう共同幻想に対する考察が不足しているんじゃないかと思へたんです。答えがみんな現在見える見え方になっていて、制度としての観点と言ひましようか、共同幻想論的な観点がどこにも入っていない。そのことが気になって、そこは自分でもやってみようとなつたのです。それで、実朝と西行に狙いを定めて、古典の問題をやつたわけです。(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1998年3月20日)

「共同幻想」つまりその時代を規定する思想の枠組みに対する感覚が小林の議論には欠乏しているといふのである。こうした吉本の発言に示された小林への違和感の萌芽は、すでにこの文章のうちに萌していたといふことができる。

もちろんこのような認識は、一連の論稿を執筆するさいに初めから吉本のうちにあったわけではあるまい。自らにおけるランボー、ヴァレリイ、マルクスな



どの影響をたどりつつ、そしてその背後に横たわる小林秀雄の大きな影響の跡をたどりながら、その上に戦前と戦後にわたる個人的な体験をかさねあわせたとき、吉本のうちに新しい認識として到来したのである。そして、それこそが、吉本が求めていた、小林秀雄を乗り越えていくための新しい認識であった。

小林がヴァレリーを論ずるに当たって参照するのは哲学者デカルトである。「テスト氏の方法」において、

哲学者に対する無関心は不信用は、ヴァレリイが機会ある時に示してある処だが、デカルトだけは例外である。彼はヴァレリイの推賞して止まぬ唯一の哲学者であり、「方法除説」はヴァレリイが取上げて批評してある唯一の哲学作品だ。(『小林秀雄全集』第6巻、538頁)

と述べ、さらに、

デカルトは、「その注意力の全体を以つて、自分のうちに閉じ籠つた」、テスト氏の言ふ内部の島を創り上げた。島を廻つて「形と運動とに還元された」人生といふ大海があるだけだ。(545頁)

と述べるなど、ヴァレリーを論ずるにあたってデカルトをしばしば援用している。

吉本は「僕の脳裏には時折デカルトとパスカルといふ十七世紀前半における二人の天才の名が蘇つた」(24頁)と述べて、小林と同じくデカルトを参照するものの、そのヴァレリー批判に於いて援用するのはパスカルである。

小林秀雄にも『文学界』1941年7月号に掲載された「パスカルの「パンセ」」という文章がある。

「無限に比べれば虚無、虚無に比べれば一切、無と一切との中間物」。「僕等は何も確実には知り得ないが、又、全く無智でもあり得ない。僕等は、渺茫たる中間に漂つてゐる」。これが、パスカルの見た疑ひ様のない「人間の真実な状態」であり、人生はさういふシステムとして理解されなければ、それは誤解であり、さういふ実在として知覚されなければ、錯覚である(『全集』第7巻、271頁)

ここに「虚無」という言葉が出現するのは偶然ではない。「虚無」こそはパスカルの重要なキーワードであった。しかし、小林はヴァレリー論にパスカルを援用することはなかった。吉本は、小林のこの発言からパスカルをそして「虚無」という言葉を示唆されたのかも知れない。

まさしくパスカルこそは、そしてその「虚無」の概念こそは、吉本のヴァレリー批判の、そして小林秀雄批判の切り札となったのである。

たとえば、

知性による虚無の抑圧、酷使……虚無とは元来倫理的なものであるにもかかわらず、彼はこれを論理的なものに変へてしまふ。……殆ど功利的と思はれる理性による行為の適度な抑圧、制御がデカルトにおけると同様にヴァレリイにおいても存在する。……優れた方法的思想と世俗的常識がデカルトにおけると同様に、ヴァレリイにお

いて矛盾なく結合する。……これらは殆ど僕を嫌悪せしめるに充分である。(32～3頁)

また、

彼が闇黒の彼方から手に入れた虚無は論理的なものに愛貌してしまふ。もつとも彼は彼にふさはしい偶像を叩き上げた。正確さの極限を指向する能力において曖昧さを嫌ふ極度の潔癖さにおいて彼は常識に或る積極的意義を与へた人物たるの光栄を所有するのである。偉大なるものはやや脆弱な出来だ！(36頁)

いずれも、ヴァレリーを批判する重要な場面に於いて「虚無」の概念が出現する。

パスカルというアイディアを吉本はどこから手に入れたか。三木清の『パスカルにおける人間の研究』によれば、パスカルこそはデカルトの発想に対するもつとも攻撃的な思想家であった。

デカルトも彼の生涯を通じて偏に確実を求めたけれども、その確実はひたすらに理論的な確実、妥当なる命題の系列の基礎となるべき確実に過ぎなかつた。(中略)

これはパスカルには許し難きことと思はれた。我々の存在そのものの不安にとつてはデカルトの確実はむしろ不確実に過ぎない。これでパスカルは、「デカルトは無用であり、不確実である」(78)、と評してゐる。(三木、44頁)一九二六年六月に岩波書店から刊行された三木清の『パスカルにおける人間の研究』を吉本が読んでいたことは疑いあるまい<sup>9)</sup>。

三木は『パスカルに於ける人間の研究』において、以下のように述べている。

「中間」の概念が単なる比喩や象徴でなく、却て存在の具体的な存在の仕方そのものの規定であることは、パスカルがそれに与へた数学上の意義を考へることによつて一層よく理解されよう。虚無(néant)または無(rien)の観念が非存在或は非概念の謂でなく、むしろ甚だ重要な意味を有することも同様にして明瞭である。(三木、104頁)

三木は、パスカルにおいて「虚無」という観念は「非存在」ではなく「重要な意味」をもっている述べている。そして吉本においても、「虚無」という観念はそのようなものとして使用される。

しかし、吉本は三木の考察をそのまま受け入れていたわけではない。吉本は「〈パンセ〉を貫く原理、僕は大変大胆な言ひ方をするがそれは平衡と実験といふ二つの方法だ」(33頁)と断言し、

〈パンセ〉は断じて冥想録などといふ生易しいものではない。實在に当面し、総合して導いた断乎たる精神と肉体との経験の書だ。平衡とは實在を支配してゐるパスカルの神である。(34頁)

と論じている。この断言は、

然しながら人間の存在が中間的存在であると云ふことはこの存在が平衡を保つてゐる存在であることを意味しない。(三木、17頁)

という三木の判断とはあきらかに異なっている。

さらに、吉本は、

デカルトは実在を抽象して法則を得る。法則が得られれば実在はもはや用をなさない。(中略)

パスカルは実在を総合して法則を得る。法則は再び実験によつて検せられる。法則は独りで歩み去ることはない。飽くまで実験と密着する。(34頁)

というように、実在が科学のために存在するのではなく、実在を理解するために科学が存在するとい結論を引きだしてくる。これは、この後、現代物理学における確率概念などへと話が展開しているように、三木とは別の、吉本独自の議論であろう。

この後、議論は、『詩文化』所載の3つの論稿を締めくくるように、最初のテーマ、敗戦直後の自らの体験へと戻ってゆく。

そのころ「僕が幾分かテスト氏であつた」と吉本は回想する。しかしそれは、他人から自己を守るための「自己保身術」であつたと吉本は述懐する。これは戦後に於ける自ら対する小林秀雄の影響について述べたものと解される。やがて、東工大における遠山啓の自主講座によつてその密閉空間は打ち破られ、あの「最早動かすものもありはしないと思はれた僕の虚無が光輝をあげた殆ど唯一度の瞬間」がくる。

「今や僕のヴァレリイに対する熱愛は喪はれる」と吉本は続ける。

ヴァレリイの方法的思想において、実生活の占める量は常に極小値である。換言すれば思想家たるの必要条件を人生の門出に際して紛失したのである。すべては知性の方面からのみ彼の興味を惹く。彼が闇黒の彼方から手に入れた虚無は論理的なものに変貌してしまふ。(36頁)

ヴァレリイの思想には現実を解き明かし解決する能力はまったくないと吉本は結論する。

「実生活」の「極小値」という言い方には、三木の『パスカルに於ける人間の研究』における次のようなフレーズが反響しているように見える。

我々の間ふものは生の色なき匂なき原因ではない。現実の理由とは生の現実を具体的に説明し解釈するところの理由である。従てそれは生の科学研究によつて説明される種類のものではなく、却て生の存在論的分析によつて提示される性質のものである。それは生ける生のうちに横はりつつみづから生きてはたらき、生の生ける姿を来て規定する生のものの契機である。(三木、123頁)

それはパスカルの『パンセ』の、

人間とはいつたい如何なる非凡の者であるかよ。凡てのもの裁判官、愚かな蚯蚓。真理の受託者、曖昧と誤謬との塵捨場。宇宙の榮譽にして屑物。(三木前掲書、38頁)

という一節を踏まえたものと考えられるが、それは、三木自身の、

直観はそれ自身の仕方に於て確実である。根本概念が定義されず、根本原理が証明されぬと云ふのはそれらの曖

昧からではなくして、却てそれらの「極度の明証」(extreme evidence) から来る (IX, 255, 257)。自然的なる光に依る認識は証明的でないが、そのために確実であることを失はない (IX, 246)。(前掲三木著書、134頁)

という理解とは明らかに異なっている。つまり、三木はパスカルから直観の明証性を引き出すのに対して、吉本は現実の根源的な曖昧性をまるごと捉える方法を模索するという発想をインスパイアされるのである。それは吉本自身の問題意識から発想された吉本自身の結論であつたといことができる。

吉本は、ヴァレリイに、そして自らのうちなる小林秀雄に対して、決定的な結論を投げつける。

且て僕らの国の所謂知識人たちは、彼らの脆弱な精神の錯乱を救済するものをヴァレリイの表現してゐた処にかけた。僕はヴァレリイの〈精神の危機〉を読む機会を持つたがそこに唯ヨーロッパ文明に対する限りない自讃の外、何物も見出すことが出来なかつた。唯飽くなき知性の操作によつて見事に解釈してゐる彼を見出しただけだ。不安な魂……そんなものは彼の何処にも存在しない。

(36~7頁)

これは、まさしく吉本小林秀雄に対する告別の辞であつたといことができる。

## 註

- (1) ここで吉本の言う『資本論』は象徴的な意味であると見るべきであろう。吉本が本格的にマルクス『資本論』を読んだのは1950年代の初頭、『マチウ書試論』を構想した時期に引き続く頃と考えられる。
- (2) 吉本の賢治への関心が、保田與重郎に触発されたものであることについては拙稿「敗戦前後の吉本隆明——保田與重郎理解をめぐる——」『愛知教育大学研究報告』2008年3月参照。
- (3) この点については、石岡善治郎『吉本隆明の東京』(2005年12月、作品社)に以下のようにある。「この時期、授業がなかったのは、偶然のことではない。閣議決定で小学校を除く全学校・大学で、昭和二十年四月一日から二十一年三月三十一日まで休止されていたからなのだが(「決戦教育措置要項」)」(84頁)。
- (4) この点に関して三浦雅士は「吉本隆明の〈原点〉『吉本隆明全詩集』刊行を機に」(『週刊読書人』2003年9月19日)という文章で「かつて小林秀雄はボードレールの自意識の球体からランボーの行動へと移つたが、吉本隆明は同じような過程を経て、さらに遠くマルクス主義へと到達したのである」と述べているが、これは類比として語られており、両者の影響関係を論じたものではない。
- (5) 磯田光一は、府立化工から米沢工業学校への進学過程において吉本の「父親殺し」があつたというが首肯しがたい。吉本に〈父親殺し〉の体験があつたとすれば、敗戦直後のこの時期であつたと考えられる。応用化学から純粋科学へ、そして批評家へという道行きはまさしく、それまでの父親の教えからの決定的な背反といふことができよう。
- (6) この点については小林自身『自著を語る』(2007年6月、ロッキング・オン)で「敗戦直後、マルクス主義者はじめ左翼的な論調が旺盛になってきたんですけど、(中略)た

たとえば戦前に小林秀雄がマルクス主義者と論争して、彼のほうがよっぽどマルクスの考え方をよくわかってるっていうか、マルクス主義者のほうが全然わかってないみたいな感じがあって、戦後はすぐにそういう感じが蘇ってきたんです」と語っている。(41～2頁)

- (7) 「虚無」の語は小林秀雄には見えない。吉本において「虚無」の語は、1947年7月発行の東京工業大学電化会機関誌『季節』に掲載された「伊勢物語論Ⅱ」において、重要な概念として登場している。「日本の虚無思想がいつもこの様な健康なものに祈らねばならなかったことに就いて僕は昔も今も変らぬ悲劇を感じる。それは僕達が科学を持たなかったからだに僕には思へる。ヴァレリを見給え。彼は虚無のどん底に在っても合理精神といふ楯に拠って殆んど雄

叫びをあげてゐるのだ。彼ならば飽くまで「秋の夜の千代を一夜になずらへて」などは感傷として一笑に付することが出来たのだ。伊勢の作者にはそれが出来なかったのだ。敗戦の悲劇などはこれ以外に何処を探しても落ちてはいしない。僕達は尚も何ものかを乗り越えゆかなくてはならないのだらう。」(『全著作集』第4巻, 21頁)

- (8) たとえば戦中戦後をつうじての吉本の宮澤賢治研究は、まさしく戦時体制下における一種の防衛機構であったと考えられる。
- (9) 吉本の論文「歎異抄に就いて」に「例へば三木清の遺稿「親鸞」について見られたし」という個所があり、この時期の吉本が三木清に関心を懐いていたことは明白である。

(2009年9月8日受理)